

事務連絡

令和6年5月吉日

各都道府県介護福祉士会 様

一般社団法人石川県介護福祉士会

会長 中野 朋和

(公印略)

新緑の候、貴会におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会事業の運営につきまして、格別のご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

この度の能登半島地震発災に際しましては、皆様からの心温まるご支援、ご協力を賜り、深謝申し上げます。

石川県介護福祉士会は1月1日の地震災害発生時から災害対応を開始し、1.5次避難所（マルチパーパスルーム）においては、日本介護福祉士会と共に要介護者に対する介護支援活動を行ってまいりました。この間、全国より延べ800名強の会員及び介護福祉士の方々の温かい支援に支えられ活動を継続することができましたのもひとえに皆様のご尽力の賜物と重ねてお礼申し上げます。

今後も地域のニーズに合わせた災害支援活動を通じて、震災からの一日も早い復旧・復興に貢献してまいります。

つきましては、石川県介護福祉士会発行の広報誌「かいご」67号に災害ボランティア関係の記事を掲載いたしましたのでご一読いただければ幸甚に存じます。

尚、今後とも更なるご支援、ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

令和6年能登半島地震

一月一日午後四時十分発生

いしかわ総合
スポーツセンター

1.5次避難所で私たちは



二〇二四年一月一日十六時十分。コロナも落ち着きようやく晴々しいお正月の光景にそれは起きました。

「大変なことが起こったぞ！」一月一日からのあの緊張感はまだ解除しないでおります。

能登に在る知人や親戚の無事を電話で確認し、安堵を覚えたかと思えば連絡はすぐにできなくなる。そんな中、金沢ブロックのグループLINEでは被災地の介護福祉士や要介護者に何かできることはあるかと連日情報交換を行なっていました。一月十日に県スポーツセンターに1.5次避難所に施設を作ると話が出た時、金沢ブロックでは「介護の力で動こう！」と自然と気持ちが集まっていたように思います。地震発生から十日という日数が経ち、どのような状態で避難してくるかわからない、何人来るかわからない、ましてボランティア（自己責任）で活動するという背景の中でのスタートでした。

初日に県スポーツセンターの施設避難者一時待機所に駆けつけたのはDMATと介護福祉士会のみ。同日に金沢に避難された方から聞けば、マイナス2度の環境で衣類を十枚着込み過ぎしていたと聞きます。そ

一瞬で必要な介護内容を見抜く

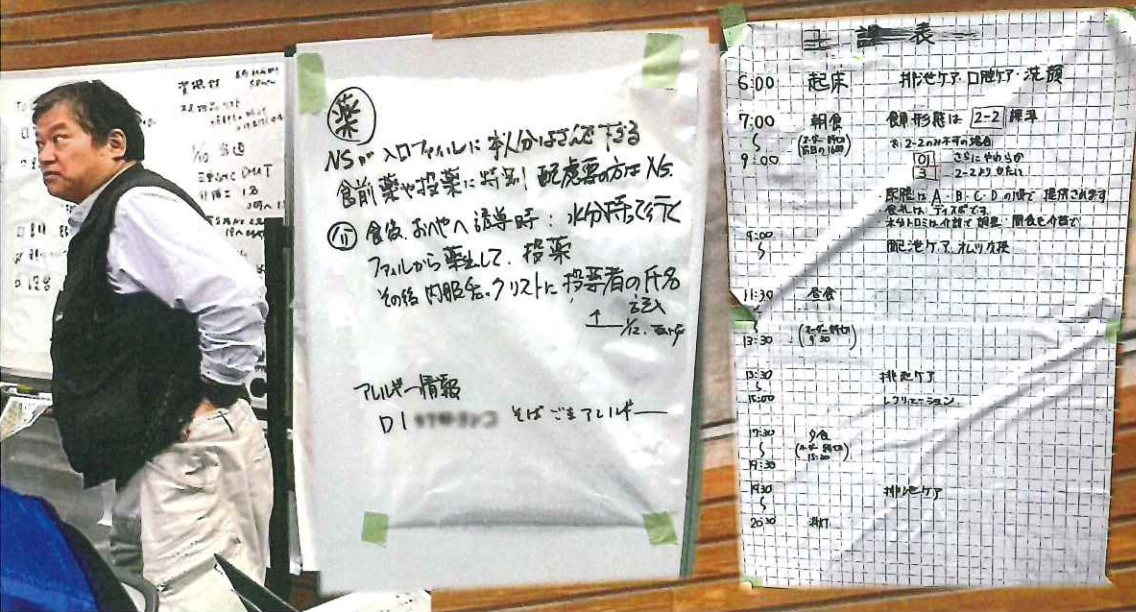
泉 幸恵 生活支援センター 陽風園

のような要介護高齢者を受け入れるということ、初めてお会いする利用者を、初めましての介護チームで受け入れるということ、まして翌日には施設の受け入れ先が決まり避難所から退所されるというスピードの中で「その人（氏名間違い）のまま送り出したか？危険はないか？」と心配したのは一瞬でした。

さすが介護福祉士！避難された利用者が不安にならないよう普段通りの笑顔と、一瞬で必要な介護内容を見抜く力を初日から発揮していました。また、「とにかく介護福祉士を集めて欲しい！」そんな呼びかけで集まった介護福祉士会メンバー、食事の箸を置いてまで駆け付けてくれた有志の仲間を誇らしく思います。

まだ被災地域は「ふつうのくらし」に戻っていません。私達も被災地域の介護福祉士の皆様、要介護状態の高齢者が「ふつうのくらし」に戻れるまで一月一日の緊張を持ち続けます。

「何かできることはないか？」災害支援での介護の力、「実効力のある提案」とそれを「実行できる介護福祉士」が求められていると強く感じました。



一日目

6:00	起床	排泄完了・洗顔
7:00	朝食	食形態は 2-2 標準
9:00	(8:00-10:00)	2-2 標準 2-2 標準
9:00	(10:00-12:00)	2-2 標準 2-2 標準
11:00	昼食	原形は A・B・C・D の中で 使用する
13:00	(12:00-14:00)	排泄完了、洗顔
15:00	午後	排泄完了
17:00	(16:00-18:00)	排泄完了
19:00	夕食	排泄完了
20:00	就寝	

NSの入口... 食前薬と投薬に特別配慮要あり

① 食後薬の投薬時：水分補給を
7.5mlから増して、投薬
の後に服薬。クリに投薬者の氏名
記入
1/2. 50g

7.5ml-情報
DI 投薬のときは7.5ml



一月一日：能登は言わずと知れている超高齢化地区。毎日入る知人からの情報で避難先に介護福祉士が必要なことは、すぐに感じた。家族の身の安全を確認。被災している同志に何ができるか？道が崩落・遮断の情報。被災の友人に繋がらない。個人で行けば迷惑になる。金沢で出来ることはないか？

一月四日：モヤモヤ。県内約千人の会員を有する介護福祉士会。今、動かなければ何の為の団体なのか？この大惨事に動かなければ、私は何の為に理事をしているのだろうか？ 続くモヤモヤ。

一月七日：他団体で、現地・施設間の橋渡し活動開始。現地の壮絶な状況を目の当たりにする。

一月十日：1.5次避難所立ち上げ。介護福祉士としてスポーツセンターに入る。1.5次避難所って何？とにかく死が迫る環境から温かい場所に移す計画？仮施設を作る？いつ何人来る？どれくらい介護を必要とする人たち？物品はいつ届く？誰に何を言えば、環境が整う？

生活用品など何もない体育館。電気回線工事の横でDMATと段ボールベッドを組み立てる。トイレもない。水もない。消毒剤もない。オムツも衣類も寄付の持ち込みだけ。目まぐるしく変わる情報。被災地情報は混乱かつ、天候に左右されている。とにかく搬送されてから動くしかない。必要と思われる介護からやってみていくしかない。

搬送が始まり、一度に七人入所。二十二時に十四人入所。翌日には五人退所し県内

1.5次避難所立ち上げ期で感じたこと

居宅介護支援 そよ風 大倉 清美

施設へ（例）。その日の入退所情報についていくだけで精一杯。利用者の間違い、事故が一番怖い。搬送利用者には氏名入りガムテープが貼られるが、そもそも、顔と名前が一致していない。一つの対応に、とにかく確認の時間がかかる。短時間で搬送利用者の状態像を捉え、何を優先してケアすべきか、即座に判断する能力が求められた。

事前の情報はゼロ。あっても、すぐ使える情報を探し出すことに難儀し、ADLも情報と食い違いがある。しかし、介護全体で集まり情報交換する時間もなければ、私自身、本部会議内容や伝達したい内容をまとめる時間すら持てない。ボランティア有志へ情報をつなぐにはどうしたらいいのか。疲弊し頭が整理できていないことが自分でも分かった。冷静さを持ち続けて、やるしかない。ボランティアの域を超えている。でも介護の手は、一人でも、十分でも欲しい。とにかく人集めが最優先だと呼び掛けたい。

この説明不足の状況下で即日集まってくれた仲間、一生の財産。ただただ、何か手伝える事はないか、と個々の時間を割いて1.5次避難所に駆けつけてくれた。

二月十九日：今、振り返っても仲間の根底にある被災者ファースト、温かい人間味に感銘を受ける。そのバトンを日本介護福祉士会がつかないでくれている。状況は刻一刻と変わっているが、今なお続く、被災地・被災者の苦悩、当会の支援体制を考えさせられる状況が続いている事を肝に銘じたい。

